

聖学院中学校・高等学校(男子校)

《国語科募集要項》

1. 募集人数 1名
2. 採用期間 2023年4月1日～2023年10月5日（更新の可能性あり）
3. 雇用形態 特任教諭のみ / 非常勤講師のみ / 特任教諭・非常勤講師どちらの雇用形態でもよい
※どの雇用形態を希望するかを履歴書にご明記ください。
※今回の募集は育休取得者の代替募集のため、育休期間が延長された場合、それに伴い、採用期間が2024年3月31日まで延長する可能性があります。
4. 応募条件 ①キリスト教教育に理解のある方
②中学校及び高等学校の国語科教員免許状を取得又は取得見込みの方

5. 応募書類

- ・「特任教諭のみ」または「どちらの雇用形態でもよい」を希望する場合
 - ①履歴書（書式自由、写真添付（3か月以内に撮影したもの）、メールアドレスは必須、年号は西暦でご記載下さい）
 - ②卒業証明書（又は卒業見込証明書）
 - ③成績証明書※②・③は大学院修了（又は見込み）の方は学部関係書類も合わせてご提出下さい。
 - ④教員免許状（又は取得見込証明書）写し
 - ⑤自己推薦書（A4サイズ、書式は自由）
 - ⑥他者推薦書（新卒の方は在学指導教官等の推薦書、新卒以外の方は別途メールにてご相談下さい。）
- ・「非常勤講師のみ」を希望する場合
 - ①履歴書（書式自由、写真添付（3か月以内に撮影したもの）、メールアドレスは必須、年号は西暦でご記載下さい）
 - ②教員免許状（又は取得見込証明書）写し

備考

- ・履歴書に「特任教諭のみ」「非常勤講師のみ」「特任教諭・非常勤講師どちらの雇用形態でもよい」を明記してください。
- ・免許状更新手続き者は修了証明書も同封して下さい。
- ・選考結果はメールでお送りしますので、①「履歴書」に必ずメールアドレスをご記載下さい。
- ・応募封筒の表面に「国語科応募書類在中」と明記して下さい。応募書類は返却致しませんのでご了承下さい。なお、出願書類に記載されている個人情報を選考のためにのみに使用し、それ以外の用途には一切使用致しません。

6. 給 与

- ・特任教諭の場合
本俸 238,358円（学部新卒2022年度実績、経験による前歴換算あり）
賞与 年1回（夏・冬一括支給） 研究日制度あり
- ・非常勤講師の場合
10,305円以上：週1時間当たりの月単価（学部新卒2022年度実績、経験による前歴換算あり）

7. 応募締切

- 2023年 1月13日（金）郵送必着、窓口持参の場合、午後4時まで〔厳守〕
※2022年12月29日（木）～2023年1月5日（木）は学校閉鎖期間となります。
※応募書類をご提出（ご郵送）いただきましたら、第一次選考当日（1月14日（土））、直接本校にお越し下さい。選考日前に改めてご案内の連絡は致しません（書類選考はありません）。

8. 選考場所 (送付先) 聖学院中学校高等学校
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1
交通：JR 山手線「駒込駅」東口下車徒歩5分
東京メトロ南北線「駒込駅」4番出口徒歩7分
電話：03(3917)1121
9. 選考日程 2023年 1月14日(土)
選考内容「模擬授業」及び「面接」 16時～
※模擬授業では電子黒板を使用できます。詳細は別紙(採用試験 選考内容について)をご確認ください。
※選考結果は1月19日(木)までにメールにてお知らせいたします。
※選考を通過された方は、健康診断書〔身長、体重、視力、聴力、胸部X線(間接)、血圧〕(6ヶ月以内のもの)が必要となります。詳細は法人本部人事課よりご連絡致します。
10. 授業コマ数
・特任教諭の場合 15～16コマ
・非常勤講師の場合 12コマ程度
11. その他 ①上履き及び下履きを入れる袋をご持参下さい。
②ご不明な点があれば、総務統括部長/日野田昌士(m-hinoda@seig-boys.jp)及び国語科教科主任島立光人(m-shimadate@seig-boys.jp)までメールにてお問い合わせください。メールの件名は【採用について+お名前】としてください。3日以内に返信がない場合には、お手数ですが、本校代表(03-3917-1121)までお電話ください。

採用試験 選考内容について

- 模擬授業テーマ：中学1年生に古典文学に対する興味関心を抱かせる。
使用教材：蓬萊の玉の枝——「竹取物語」から
想定する時期：中学1年3学期1月
時数：全四回中の一回目の授業の冒頭(10分間)
備考：自作プリントの配布可能(枚数は10枚ご用意ください)。
電子黒板の使用可能(PCは各自でご用意ください)。

蓬萊の玉の枝——「竹取物語」から

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思って、近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、(背丈)三寸ほどの人が、まことにかわいらしい様子で座っていた。

これは、現在伝わっている日本の物語の中では最古のものといわれている「竹取物語」の冒頭部分である。この後、物語は次のように続いていく。

子供を授かったと喜んだ翁は、その子を籠の中に入れて大切に育てた。子供はすくすくと成長して、わずか三か月ばかりで一人前の娘になった。その姿は輝くばかりに美しく、辺りに光が満ちるようであったから、娘を「なよ竹のかぐや姫」と名づけた。

美しいかぐや姫のうわさが広まると、多くの男たちが、ぜひ結婚したいと集まってきた。かぐや姫は、なかでも熱心な五人の貴公子の求婚を断り切れず、望みの品を持参した人と結婚すると言って、一人ずつに難題を出した。かぐや姫の望みの品は、いずれも入手至難のものばかりであったが、五人の求婚者は、それでも姫との結婚を諦め切れず、それぞれに知恵や富の力で難題に挑むのであった。